

国際耕種と私・長谷川繁弥<その3>

KAF プロジェクトでの出会いが縁となって JICA 筑波研修業務につながった

オイルショック後、鹿島石油は砂栽培を梃子に産油国との関係強化を企画し、進出先を検討していた。1979 年、UAE のアルアイン市にある政府試験農場での実証試験・鹿島アブダビファーム（KAF）プロジェクトを決定した。現コスモ石油出身の上司・同僚が勤め、アブダビの石油・天然ガス政策を司るアブダビ国営石油会社(ADNOC)と密接な関係を築いていたアブダビ石油株式会社の縁もあったが、最大の決定要因は、我々の計画した実証試験地域の砂漠でアスファルトを砂中に敷き野菜栽培実験を行った日本砂漠開発協会のプロジェクト担当者であり、AAI 創業者の大沼洋康氏に 1980 年の現地調査で出会ったことであった。大沼氏の多岐にわたる経験は、事業報告書からは得られない示唆に富むものであった。

試験農場でのヨルダン、スーダン、イラク等の技術者や、重労働を担うパキスタンやアフガニスタンからの人達との接し方、敬意を払い同僚としてつきあうこと等、現場を預かる私には貴重なものであった。今振り返れば JICA 筑波での研修員と同じ国々の人との出会はこの時であった。KAF プロジェクトからは目標（Vision）を練り上げ、達成に向けた努力（Hard Work）が大事であることを学んだが、後の大きな仕事である JICA 筑波研修業務につながる出会いの時でもあった。

AAI が会社として 1985 年から始めたドバイ郊

外修景緑化プロジェクトや静岡大学農学部とアラブ首長国連邦大学農学部による沙漠緑化に係る共同研究の開始が、財津吉壽氏や湖東朗氏との出会いであった。そして、20 年近く携わった JICA 筑波での研修指導業務に巡り会えたのは、日本砂漠開発協会プロジェクトで大沼氏の同僚であった利光浩三氏が研修業務課におられたことであった。

次の縁は KAF プロジェクトでお世話になった方々と JICA 筑波で再会したことである。砂漠砂による栽培と養分欠乏などの関係を教えていただいた大阪府立大学の池田英男教授（当時）、そして当時の日本では珍しい、イボ無し長尺の温室キュウリ種子を取り扱っていた、みかど種苗(株)の育種農場の農場長であった船串尚氏である。お二方は集団研修「野菜栽培技術」コースの外部講師として長年研修に係わっておられ、実践的技術の習得に欠かせない植物生理と生産環境を整える技術、研修の第 2 目標である採種に係る技術など、頼りになる外部講師であった。そして、輪作・作付体系に詳しく畑作分野で活躍し、JICA 筑波の研修指導者を退職したばかりの故大久保隆弘氏がタジキスタン国の研修指導に復帰され、一緒に業務を行えたことである。農林水産省に係る見学先や講師との調整が容易だったのは大久保氏の北海道から九州までをカバーするネットワークの賜であった。

19 年間に 47 カ国、208 名への野菜・畑作物の栽培技術指導に携わったが、多くの出会いに恵まれた結果と思っている。



養液栽培パプリカの生育診断を指導する池田教授



大沼氏、筆者、小島氏
Umm al-Qaywayn 水産養殖場



政府農場の技術者達と実証施設建設予定地にて



2001 年タジキスタン国の実験結果発表を評価する大久保氏(右前)、財津氏・湖東氏(右 2 列目)